

歴文29年12月研修会  
「地元史探訪と座学」  
—菅原町周辺の歴史探訪—

- 1、実施日：平成29年12月17日（日） 雨天実施
- 2、集合場所・時間：近鉄尼ヶ辻駅前 9：00
- 3、スケジュール

①午前の部・・・地元史の探訪

集合：尼ヶ辻駅（9：00出発）  
⇒喜光寺（講話9：30～10：20出発）  
⇒菅原天満宮（菅原神社）・菅原東遺跡埴輪窯跡群  
（10：25～10：50）  
⇒八幡神社（11：15～11：30）  
⇒西大寺東塔跡の前（11：40）  
⇒自由見学・解散

②午後の部・・・見学と座学

集合：奈良文化財研究所 資料館前（13：00）  
⇒資料館見学（13：00～14：00）  
⇒講演：奈文研副所長 渡辺晃宏氏（14：00～15：00）  
⇒懇談：次年度の計画案（15：00～15：30）  
⇒解散

奈良・人と自然の会  
歴史文化クラブ

担当世話人：鈴木末一、永井幸次、坂東久平、古川祐司  
（事務局・連絡先 古川祐司）  
（Tel 0742-44-8621、090-4298-2344）

## 歴文12月研修会資料

### 1、西ノ京と菅原町

#### ①西ノ京

西ノ京のいわれは詳らかでないが、元禄9年、貝原篤信による「和州巡覧記」に、「孝謙天皇御出家の後、此地にましましける由、正統記に見えたり、故に西ノ京と云」とあり元禄時代にもその名があったようだ。因みに離宮が丘町に「瑠璃京跡」という石碑が立っているのは、孝謙天皇にゆかりのある離宮「瑠璃京跡」ではなかろうか。

西ノ京の一带は、平城京の右京の地で右京一坊～二坊大路に沿って西大寺、唐招提寺、薬師寺、喜光寺等の諸大寺や皇族・高官の邸宅が立ち並んでいたところである。

#### ②菅原町

当地の地名である「菅原」はスゲ（菅）の自生地・草原を意味し、元来は平城宮以西の広大な丘陵地域を指した名称とされる。菅原の地は、古くから豪族土師氏の一族が住み着いたところで、平城遷都の際に、90戸の民が居所を移転して、遷都に協力したことが記録に残っている。

#### ・菅原の地名が現れる文献

日本書紀・垂仁天皇九十九年の項に「天皇纏向の宮に崩ましぬ。・・・菅原の伏見陵に葬（かく）し奉る」とある。

日本書紀・安康天皇紀の即位三年に亡くなられ「三年の後に菅原伏見陵に葬（おさ）めまつる」とある。

続日本紀に、元明天皇和銅元年一二月、「菅原地の民十余戸を遷して布穀を賜う。」とある。

#### ・奈良市史によると、

「土師氏が早くから菅原を占拠した。嘉祥元年（848年）菅原陳経の著した「菅家御伝記」によると「天穗日命十四世の孫、野見宿祢は垂仁天皇崩御の際、その喪葬に任じ、ついで皇太子はさらに土師氏を以て陵戸に充て、兼ねて山守たらしめた。爾後、土師氏は永く菅原の地に住することになる。奈良朝の末、天応元年（781年）居地によって菅原の姓を賜ったのである」と記す。

・「続日本紀」にも、光仁天皇の天応元年六月二五日、居地の名により土師を改

めて菅原の姓をなさんと請い、許されたことを記している。

菅原町には喜光寺があり、行基菩薩の開基といわれているが、古くは菅原寺と呼ばれた寺であり、菅原氏の氏寺であったと思われる。

・昭和44年3月の発掘調査の際、喜光寺境内の南部から、溝、築地、基壇跡や多くの古瓦が出土し、菅原寺と書いた瓦も出ている。

(奈良町風土記 山田熊夫より)

## 2、喜光寺

喜光寺（きこうじ）は、奈良県奈良市菅原町にある法相宗の寺院。この一帯が菅原氏の治領であったことから「菅原寺」とも呼ばれる。山号は清涼山。本尊は阿弥陀如来。奈良時代の僧・行基が没した地とされている。薬師寺の別格本山。

1969年に境内の発掘調査が行われ、現・喜光寺本堂は、奈良時代の創建本堂の跡に建てられていることが確認された。創建金堂の基壇は東西が28メートル、南北が21メートルの規模であった。そこから南に42メートル離れた場所に南大門跡とみられる建物跡があったが、礎石は残されていなかった。

### ・本堂

本堂（重要文化財） - 室町時代に再建された寄棟造、単層裳階付きの仏堂で、裳階の正面一間通りを吹き放しとする。この建物は、行基が東大寺大仏殿を建立する際に十分の一の雛形として建てたとの伝承から、「試みの大仏殿」と俗称される。

・南大門・・・再建後に焼失。再び再建され2010年5月に落慶法要。

### ・重要文化財（国指定）

本堂・・・室町時代前期。

木造阿弥陀如来坐像・・・平安時代後期。像高233cm。

### ①行基と菅原寺

奈良時代に架橋、土木工事などの社会事業に携わり、東大寺大仏造立にも貢献した僧・行基が創建したと伝わる。『行基年譜』（安元元年・1175年成立）によれば、菅原寺（喜光寺）は、養老5年（721年）、寺史乙丸なる人物が自らの住居を行基に寄進し、翌養老6年（722年）行基がこれを寺としたものであって、行基建立の四十九院の一つであるとされている。

寺地は平城京の右京三条三坊の九ノ坪、十ノ坪、十四ノ坪、十五ノ坪、十六

ノ坪の計5坪を占めていたという。なお、現・喜光寺本堂の位置は、右京三条三坊の十五ノ坪にあたる。『大僧正舎利瓶記』によれば、行基は天平21年(749年)この寺で82歳で死去したという。なお、行基の墓は喜光寺から直線距離で7キロ離れた生駒市有里の竹林寺にある。前出の『大僧正舎利瓶記』は、行基墓から出土した銅筒に記されていたものである。

一方、「菅原寺記文遺戒状」という別の史料によれば、この寺は靈龜元年(715年)、元明天皇の勅願により建てられたものという。創建当初は菅原道真の生地と伝わる菅原の里にあることから「菅原寺」と呼ばれていた。伝承によれば、聖武天皇が参詣した際に当寺の本尊より不思議な光明が放たれ、これを見た天皇が喜んで、「菅原寺」を改めて「喜光寺」としたという。

中世には興福寺の末寺となり、直接には興福寺の塔頭の一つであった一乗院に属した。戦国時代に伽藍のほとんどが兵火により焼失したが、間もなく再建された。明治時代には薬師寺の末寺となった。現在は同寺唯一の別格本山という。

### 3、菅原天満宮(菅原神社)・・・ウィキペディアより

所在地 奈良県奈良市菅原町518番地  
主祭神 天穗日命  
野見宿祢命  
菅原道真公

菅原天満宮(すがわらてんまんぐう/すがはら-)または菅原神社(すがわらじんじゃ/すがはら-)は、奈良県奈良市菅原町にある神社。式内社で、旧社格は郷社。古代氏族の土師氏・菅原氏に関係する神社として知られる。



## ①祭神について

- ・主祭神の天穗日命（アメノホヒ）

『日本書紀』で「是出雲臣土師連等祖也」と見えるように、古代氏族の土師氏（はじうじ、土師連のち土師宿禰）の祖神になる。

- ・野見宿禰

土師氏遠祖になる野見宿禰は『日本書紀』において埴輪伝承が採録される人物。土師氏は埴輪・土器の製作や葬礼・陵墓管理にあたる土師部の伴造氏族。

土師氏は、『続日本紀』延暦9年（790年）12月30日条に「四腹」と見えるように4支族から成ることが知られるが、それらは和泉国百舌鳥、大和国菅原、大和国秋篠、河内国志紀郡・丹比郡といういずれも巨大古墳群（百舌鳥古墳群・佐紀古墳群・古市古墳群）の营造地に対応する。

4支族のうち百舌鳥・菅原・秋篠の3支族は、8世紀末頃にそれぞれ大枝氏（のち大江氏）・菅原氏・秋篠氏と改姓した。

## ②菅家

菅家（かんげ）という。もとは土師（はじ）氏。野見宿禰の後裔という。古くから垂仁天皇陵のある大和国添下郡菅原に住す。『続日本紀』によれば、天応元年（781年）、この地に住んでいた土師氏古人が上表により、桓武天皇から菅原姓を賜ったという。子の清公、その子善主、是善は、漢学者として名高く、以来、儒学の家として大江氏と並び称せられた。是善の子道真是宇多天皇に信任され右大臣にまで進んだが、藤原時平のために大宰府に流された。代々、文章博士、大学頭などが出たが、のち高辻、唐橋、五条、東坊城などの諸氏に分れた。

菅原古人の子清公（770年（宝亀元年） - 842年（承和9年））（従三位・非参議）、および孫の是善（812年（弘仁3年） - 880年（元慶4年））（従三位・参議）を含め、大江氏と並んで子孫は代々、紀伝道（文章道）を家業として朝廷に仕える。

菅原一帯の土師氏支族については、『菅家御伝記』にも「爾来土師氏万葉居菅原伏見邑」として土師氏が居住する旨が記載されている。実際に、一帯では土師氏の存在を裏付ける古墳時代後期の菅原東遺跡埴輪窯跡群（奈良市指定史跡）の存在が知られるほか、菅原神社の信仰圏が土師氏の分布範囲とほぼ一致することも注目される。

因みに、菅原神社の秋祭りの渡御は現在、現在の伏見・平城・都跡地区の全般にわたっており、北廻り・南廻りと交代で行われる。

北廻り：青野、西大寺、秋篠、中山、押熊、歌姫、山陵、二条、尼辻、菅原。

南廻り：足田、宝来、平松、五條、西ノ京、六条、尼辻、菅原である。

菅原神社の祭祀は、このような菅原の土師氏支族（のちの菅原氏）がその祖神を祀ったことに始まると見られているが、後世に菅原道真の誕生地とする説も生じ、現在天神信仰の神社として信仰されている。

#### 4、菅原東遺跡埴輪窯跡群、

今から約1500年前（6世紀）に埴輪を焼いていた遺跡である。平成2年（1990年）に発掘調査で発見された。この遺跡では、6基の窯跡が見つかったが、すべて斜面地を斜めに掘り抜いたトンネル状の登窯である。人物・馬・鳥・家などをかたどった埴輪がここで作られ、秋篠川を使って南方へも運ばれました。

発掘調査後、窯跡2基と灰原（はいばら）、溝状遺構は原位置で保存し、移設保存された残りの4基のうち1基は発掘時の状況が見学できるように整備しました。「菅原はにわ窯公園」という名称で市民に親しまれています。

今も周辺には「菅原」という地名が残り、土師氏は、かつて古墳の築造に深く関わってこの地に居住したと推定される。埴輪を焼いた窯跡がここで発見されたことは、それを裏付ける証拠である。

また、ここは埴輪誕生物語の舞台だったと考えられる。日本書紀は11代垂仁天皇の皇后であった日葉酢媛の古墳に、野見宿祢（土師氏の祖先）が初めて埴輪を作って並べたと伝える。すぐ南に垂仁天皇陵、北に日葉酢媛陵を眺望できたこの地に立てば、物語の背景がわかる。



## 5、西大寺

西大寺は(765年)孝謙上皇が藤原仲麻呂との戦勝祈願を祈り、金銅四天王像の造像をもって創建とする。当初の寺領は、東西8町南北4町あり、百数十の堂宇があり、面積は48ha、甲子園球場13個分にあたります。

(780年西大寺資財流記帳)には、堂内の多数の仏像は、おびただしい数の鏡で荘厳されているなど、女性らしい色彩豊かで華やかな伽藍を偲ぶ事が出来ます。又、当初は、八角7重の塔を設計したらしく、掘り下げると玉石交じりの築土をした境が八角形である事が判った。

(770年)称徳天皇が亡くなると、西大寺は急速に寂れていきます。鎌倉時代、叡尊による舍利信仰、文殊信仰が広まって、田畠や金銭の寄進により復興します。他にも叡尊が復興したのは法華寺、般若寺、白毫寺等約600に及びます。

(1502年)の兵火によって伽藍は壊滅し、現存する本堂、四王院、愛染堂、護摩堂は江戸時代のものです。

### 寺宝

#### 国宝

- (平安時代) 『絹本著色十二天図』
- (鎌倉時代) 金銅宝塔、鉄宝塔、金銅透彫舍利塔
- (奈良時代) 経典2巻

#### 重文

- (鎌倉時代) 本尊釈迦如来立像一清涼寺式三国伝来生身の釈迦如来模刻
- (鎌倉時代) 木造愛染明王坐像、木造興正菩薩坐像、  
木造文殊菩薩騎獅像及び脇侍像 等

その他 西大寺奥の院叡尊五輪塔 謡曲(百万)

大茶盛り由来 叡尊が寺の西の八幡で献茶、それを民衆に施した。



## 西大寺奥の院叡尊五輪塔

中世・鎌倉時代には、稀代の高僧・叡尊（えいそん）が出て、密教において戒律を重視した教え（後の”真言律“）を広め、「興法利生（こうぼうりしょう）」をスローガンに独自の宗教活動を推進しました。

西大寺奥の院（法界躰性院）は、叡尊上人の御廟所で、高さ 3m を超える巨大な「五輪塔」（重要文化財）が設置されています。

## ①叡尊上人

荒廃した西大寺を鎌倉期に再興する中興の祖・叡尊上人(1201～1290)は、若くして真言密教を学び、同寺に入住します。

精力的な活動の傍らで、京都・清凉寺の釈迦如来立像の模刻、愛染明王坐像や大黒天立像などを発願し弟子や仏師と共に彫り上げ、現代も続く「光明真言会」や「大茶盛」を始めるなど、西大寺独特の文化をつくり上げました。没後、正安 2 年（1300）興正菩薩の号を賜りました。



西大寺奥の院 叡尊上人の墓

・その弟子の忍性（にんしょう）は東国に赴き貧者・病人の救済にあたった。また、奈良市川上町にある北山十八間戸を開いた。



奈良市川上町にある北山十八間戸

### ③八幡神社と大茶盛式

八幡神社は、もとは西大寺の鎮守であったが、明治の神仏分離令により分離された。長承三年（1134）の南寺敷地図帳案（西大寺文書）には、一条四坊四坪に「西大寺八幡宮供田西小一反山」、五坪に「八幡宮敷地」とある。

叡尊入寺後の弘安八年（1285）十一月十七日に神体を安置（感身学正記）。本殿は室町時代の建物で、国指定重要文化財。三間社流造。本殿内部の前机三脚にはそれぞれ阿弥陀仏三尊の種子を記し、永禄九年（1566）の墨書銘がある。

寺伝によれば：

「大茶盛式は、延応元年(1239)年1月16日に叡尊上人が八幡神社に献茶した余服を民衆に振る舞ったことに由来する伝統行事です。

「戒律復興」をめざした叡尊上人が不飲酒戒の実践として酒盛の代わりに茶盛としたことと、「民衆救済」の一貫として当時は高価な薬と認識されていた茶を民衆に施すという医療・福祉の実践という二つの意義によって、八百年近く連綿と受け継がれてきた宗教的茶儀であります。」



## (メモ) 土師氏について

古代豪族だった土師氏は技術に長じ、出雲、吉備、河内、大和の4世紀末から6世紀前期までの約150年間の間に築かれた古墳時代の、古墳造営や葬送儀礼に関った氏族である。

土師氏は野見宿祢を祖先とする氏族で、野見宿祢については、『日本書紀』垂仁7年7月7日条にその伝承が見える。それによると、大和の当麻邑に力自慢の当麻蹶速という人物がおり、天皇は出雲国から野見宿祢を召し、当麻蹶速と相撲を取らせた。野見宿祢は当麻蹶速を殺して、その結果、天皇は当麻蹶速の土地を野見宿祢に与えた。そして、野見宿祢はそのままそこに留まって、天皇に仕えた、とある。

(注) 野見宿祢の「野見」は、石材を加工する際に使われている道具である「ノミ」と関連があるとみられており、野見宿祢が石材とかかわっていたと言う推定がある。この伝承は、古墳の石室などに用いられた安山岩質の讃岐岩の石材を供給する二上山の支配権が、在地の当麻氏の手から、野見宿祢に移ったことを示唆する。

野見宿祢に関する2つ目の伝承として『日本書紀』垂仁32年7月6日条があり、垂仁天皇の皇后、日葉酢媛命が亡くなった。それまで垂仁天皇は、古墳に生きた人を埋める殉死を禁止していた為、群臣にその葬儀をいかにするかを相談したところ、野見宿祢が土部100人を出雲から呼び寄せ、人や馬など、いろいろな形をした埴輪を造らせ、それを生きた人のかわりに埋めることを天皇に奏上し天皇はこれを非常に喜び、その功績を称えて「土師」の姓を野見宿祢に与えたとある。当時も技術的には出雲が先進であったことを示唆する。

やがて土師氏は、桓武天皇にカバネを与えられ、大江氏・菅原氏・秋篠氏に分かれていった。

### 《略系図》

天穗日命

|

建比良鳥命

|

(略)

|

野見宿祢

|

